# フィールド風（現場）からの ⑰④

宮田守男

## 地域で看取りや死別を支えあえる「まちづくり」に関心を持ってみませんか

**終活への関心の高まりか、会場には高齢者の聴講者も多く、講義を聞くのは初めてとの会話が**

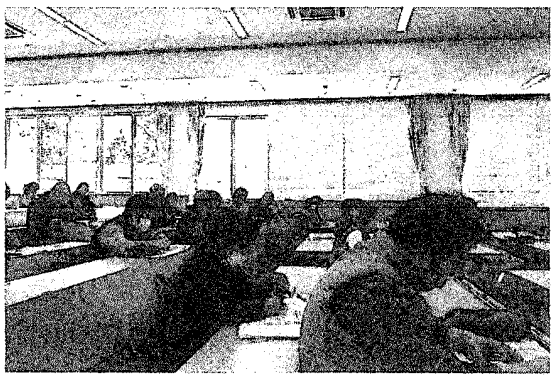
2月下旬、松本短期大学で開催された公開講座「地域で支えあえる終活・遺された人たちへのケア～最後までその人らしく美しく生きるために～」を聴講した。松本短期大学は、幼児保育学科・介護福祉学科・看護学科・専攻科を有し、福祉・医療現場など生活を支えるスペシャリストを育成する教育機関だ。今回の講座も、さまざまな立場で活躍する専門家の話を直に聞き、住み慣れた地域で最後まで、その人らしく美しく生きていく事を考える内容だった。

「終活」とは、人生の終わりのための活動の略で、人間が人生の最後を迎えるにあたって行うべき事を総括する意味だ。週刊誌「週刊朝日」から生み出された言葉で、高齢者の間では周囲に迷惑をかけずに人生を終わるための準備への話題が高まっている。

行政の立場からは、松本市中央地域包括支援センター長の北篠悟さんから、松本市の取り組みが報告された。

「お互いさま」の精神をもって創造するとの松本市の考えには、超高齢化への対応に違和感を持ってしまう。葬儀社の立場からは、JA虹のホールグループ長野エーコープサプライズの山崎美幸さんが、葬儀社としてどういった関わりをしていくべきかで話をする。葬儀を迎える状況が多様化する中で、死別体験による悲嘆を学び、その悲しみに、どの様にすれば寄り添うことができるのかの視点での話、これからの葬儀社の役割が、より重要になって行くのだろうと考えさせられる。

供養・仏事などを執り行っている住職の立場とケア活動に積極的に関わっている飯島恵道さんからは、死別悲嘆者に対する寄り添いが決定的に抜け落ちており、そのことが遺された者の死別悲嘆を深めていると指摘、「地域で支え合うことはできているのか」、「遺された人たちに対して、充分な寄り添いケアが出来ているのか」と問題提起した。



子どもを亡くした親の立場の山下恵子さんから、自分の気持ちを吐き出す場所がほしいとの報告は参加者の胸を打つ。最後に研究者の立場で、信州大学医学部保健学科山崎浩司准教授からは、必要に応じ地域全体・社会全体で支え合って行く事が当たり前であるような「まちづくり」が重要との報告がされた。

生きていて良かったと言われる地域づくりに多くの人が関心を持ってほしいと願った講座でもあった。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）